白糠のアイヌ語地名

和天別川筋のアイヌ語地名

第２回

○イオロウシ

「イオロウシ」は、河原へ向かって駒越大橋の手前、右側から山が和天別川にせまっているところを指します。

「エ（頭）・ウォロ（水についている）・ウシ（ところ）」という意味で、山の先端が川に突き出ていることを表し、旧『白糠町史』のアイヌ語地名解には「川崎、川中に出た山崎」と記載されています。

同じ地名は茶路川筋にもあり、国道３９２号を北上し、高台地区の手前、御仁田へ向かう橋の右側にある「ガンケ」がそうです。

■駒越岬

１９０１年（明治34年）、軍馬補充部釧路支部が開庁し、このあたりは支部の用地になりました。イオロウシの奥にも放牧地が設けられましたが、イオロウシの出っ張りは、放牧する馬や人の行き来にたいへん難儀な場所だったようで、軍馬補充部は、１９２３年（大正12年）、出っ張っている山を除去して川を切り替え、道路を新設することにしました。

工事は翌年完了し、山を削り、川には40メートルに及ぶ石垣を築き、その上に幅５メートルの道路ができあがり、このとき「駒越岬」と名付けられたという話が残っています。

【参考・『アイヌ語地名と原日本人』附録「白糠町内会の由来一覧」】

○ムキサニソーカ

「ムキサニソーカ」は、イオロウシの和天別川を挟んだ向い側一帯を言います。

白糠地名研究会は「ムㇰ（ツルニンジン）・サ（根）・ネ（前になる）・ソ（帯）・カ（上）」から「ツルニンジンの根が帯のように重なって前にはえているところ」と訳しています。このあたりには、一面にツルニンジンがあったようです。

■ツルニンジン

ツルニンジンは、キキョウ科のツル性の多年草で、低地から山地の林の中や原野に生育し、７月から９月に鐘の形をした花が咲きます。花には紫色の筋や斑紋があります。

根の形が朝鮮人参に似ていることからニンジンと名がつけられました。茎を折ると出る白い乳液は、独特の臭いがありますが、切り傷やできものに効果があると言われています。根は、解毒や去痰、肺病に用いられるほか、食用にもします。

かつてはアイヌ民族の大切な食糧として、特に母乳が出ないとき、根を煎じた汁を飲んだり、乳房を冷やしたり、根を焼いたり煮たりして食べたとのことです。

別名を「ジイソブ」と言い、同じキキョウ科の「バアソブ」は、この別名に対してつけられたものです。

【参考・『新版 北海道の花（増補版）』、『全道版 アイヌ民族の有用植物 薬用・食用編』、『アイヌ民族の伝承有用植物に関する調査研究（第13報）』「ツルニンジンおよびバアソブの試作栽培と栄養成分分析」】

▶ツルニンジン
転載・『新版 北海道の花（増補版）』（北海道大学図書刊行会、１９９３年）

出典：国土地理院ウェブサイト